九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造(一)

宮本, 一夫

https://doi.org/10.15017/1936934

出版情報：史淵. 132, pp.107-140, 1995-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造(一)

宮本一夫

はじめに

考古資料から集団構造を把握しようとする試みは、欧米に見られる新考古学やプロセス考古学などの社会考古学によって、一定の進展と方法論的な刺激が与えられている。特に遺跡間の構造的把握や、集落や都市の構造をもって社会構造を解釈しようとする技術的な進展が認められよう。墓葬もこうした社会構造の解釈のため、投下された労働力を基本に考えられる場合が多い。(1)

近年、中国新石器時代の墓葬から社会の階層制の進展を探る論攷が日本の研究者によって進められている。(2) 従来、中国考古学会においては、社会構造の把握とそれの歴史的な評価は必須のものであった。しかしそれはあまりにもドグマすぎていると言わざるを得ない。特に新石器時代の歴史的な社会観はエンゲルスの歴史観や家族観(3)を基本としており、現在もその息を脱しているとは決していえない。すなわち、母権社会から父権社会へ移行し、階級化を迎える段階として、新石器時代は捉えられているのである。(4) 母権社会から父権社会への歴史的な必然的変遷について人類学そのものからも疑いが抱かれている今日、(5) エンゲルスの歴史観を前提として中国先史時代を眺めることにも問題があ

ろう。現在中国先史時代において、集落資料に比べ圧倒的に多数の墓葬資料が報告されている。そこで、ここでは墓葬から社会組織の単位である人間集団の構造を如何に把握できるかを試みるものである。と同時に、これまでの区系類型理論に見られる文化的な地域単位を把握する研究方向に偏るのではなく、集団構造から見た地域的な系統性あるいは系統的発展方向に注目してみたいと考えるのである。その意味で、まず黄河中流域の事例をもって、実験的な試みを行ってみたいと考えている。

一　華北の文化系統

華北の墓葬から見た集団構造を論ずる前に、土器様式から見た地域的な文化系統と、編年的な平行関係を整理しておく必要があろう。地域的な枠組みすなわち土器から認められる集団領域をまず提示し、土器様式の変化に見られる文化的な系統性を整理する必要を感じるからである。また、その文化的な系統性における社会的な構造把握と、社会構造における系統関係を明らかにできないかと考えるからである。すなわち、各地域系統を明らかにし、この系統上で社会進化がどのように行われるかを明らかにすることを目的とする。これは社会進化が一元的に起こるのではなく、それぞれの系統に応じて特殊性を持つと予想するからである。

ここで対象とする華北で、最も古い新石器文化とされるものは、約一万年前とされる河北省徐水南庄頭遺跡[6]である。ただし、この遺跡は河川成の堆積物からなり、安定したものではないことから、不確かとする意見もある。今後注目すべき遺跡であるが、資料の増加を待って類似した時期の様相が明らかになって後、編年的問題が検討されよう。従って、この南庄頭遺跡を除くと、黄河中流域の裴李崗・磁山文化、陝西盆地を中心とする渭水流域に分布する老官台文化が最も古いものとなろう。黄河中流域の裴李崗・磁山文化は、土器様相において盂の有無など多少差異は認められるものの、壺、三足鉢、罐といった基本的な土器の組成は同種であり、同一の範疇にまとめることができる。し

かし、河南省中部に分布する裴李崗文化と河南省北部から河北省南部に分布する磁山文化は、その後の土器変遷において異なることから、地域単位としては区別して考えておいた方がよいであろう。渭水流域では、漢水上流域の李家村文化を含め、大地湾一期文化[7]、白家文化[8]、老官台文化[9]など、壺、三足鉢（鉢）、三足罐（罐）を器種構成とする同一の土器様相が認められる。こらの土器文化に関する命名は上記したように多種に亘っているが、ここでは仮に老官台文化として渭水流域の土器文化を統一しておきたい。この老官台文化の土器組成を継承して発展させたのが、仰韶文化半坡類型であることは一般に認められている。仰韶文化の変遷や仰韶文化内部での地域単位については厳文明の論攷に詳しくふれられていることから、厳文明の編年観[10]を基に論を進めていく。なお、半坡類型は現在ではさらに半坡類型と史家類型の二段階に分けられている。史家類型での時期細分も行われているが[11]、ここでは前者の半坡類型を従来の半坡類型の前半段階、後者の史家類型を従来の半坡類型の後半段階としておきたい。ここで注意すべきは、表1の編年表で示したように、黄河中流域の裴李崗・磁山文化と渭水流域の老官台文化は大枠では、壺、三足鉢、罐といった同一器種からなる土器様相を呈し、これが続いて各地域単位での仰韶文化に変遷していくことである。仰韶文化の特徴的な土器である尖底瓶、盆、瓮、彩陶などは、仰韶文化初期の半坡類型併行段階では、河南省北部から河北省南部の後岡一期を除いて、老官台・裴李崗文化の分布地域に認められる。いわばこれらの地域を仰韶文化の分布領域として認めうるのである。ところが仰韶文化後期である秦王寨期併行期では、先の分布領域において彩陶土器を持つという点では仰韶文化としてまとめることができるものの、河南省中部では鼎や豆など新しい土器器種が一般化しており、その他の仰韶文化の領域の土器の系統的な特徴とは異なっているのである。

このことをより鮮明にするには、黄河下流域の土器文化を眺めることにあろう。まず注目すべきは、先に仰韶文化の中で特殊化させた後岡一期である。後岡一期は紅頂鉢や彩陶鉢などに仰韶文化の特徴を持つものの、尖底瓶や瓮は一般化しておらず、その他の仰韶文化に見られない盆形鼎が一般化している。この特徴に対し、張忠培や喬石は、

後岡一期の分布領域に黄河下流域の北辛文化が分布しており、その系統から鼎を持つ後岡一期が生まれたとしている。[12] 紅頂鉢や彩陶鉢などの彩陶土器を特殊な非日用的な土器と仮定すれば、鼎などの日用雑器は黄河下流域の系統に属する可能性があり、後岡一期を単純に仰韶文化と呼ぶべきかという問題に達する。さて、近年、北辛文化に先行する土器文化が黄河下流域で発見されている。後李文化と呼ばれるもので、[13] 壺、鉢、罐釜からなる。器種構成は裴李崗・磁山文化に一見すると類似するものの、大半を占める器種は罐釜である。罐釜はいわば丸底の罐であり、裴李崗・磁山文化の平底の罐とは大きく異なり、長江流域の土器系統に連なるといってよいであろう。後李文化は、後李遺跡で北辛文化晩期より古い文化であることが層位的に確かめられているし、兗州西桑園遺跡では北辛文化より下層に後李文化が位置することから、後李文化は黄河下流域の今の所最も古い土器文化と言うことになろう。黄河中流域との関係は明確ではないが、土器の器種構成からは裴李崗・磁山文化に類似しており、ほぼ併行する時期のものと思われる。こうしてみると、黄河下流域と黄河中流域・渭水流域とは大きく土器様相に系統差が存在している可能性が強い。そのためこれらの二系統の中間に位置する河南省北部から河北省南部は、磁山文化の次の段階で黄河下流域の北辛文化の系統に属し、次ぐ後岡一期の段階にも日常雑器においては黄河下流域の系統にあったということができよう。同じようなことは河南省中部の仰韶文化後期にあてはまる。この段階の王湾二期は、河南省西部から山西省南部・渭水流域で一般化していない鼎や豆が一般化しており、彩陶を除く日用雑器においては黄河下流域の系統の影響が濃厚である。このように各地域単位での土器変遷を眺めた場合、これまで仰韶文化として一まとまりに把握されていたものの実体がかなり違うものであるということが認められるであろう。こうした黄河下流域から渭水流域までの華北を日用雑器による大きく二系統の土器文化として眺めた場合、表1のような系統関係として表すことができよう。こうした土器文化の変遷とそれを担う社会の実体が同一であるかに興味が持たれるのである。いわば土器文化系統は考古学的文化把握による認識体であり、それを構成する社会組織が文化的な動きと同様に変容していくかに興味がもた

れるところである。こうした社会組織すなわち人間集団のあり方を墓葬を中心に把握し、考古学的文化系統との関連で捉えることにしよう。本稿では紙面の都合もあることから、黄河中流域から渭水流域の一方の系統のみを分析の対象とする。しかしこの一方の系統も、さらに大きく言えば、老官台→仰韶文化半坡類型、裴李崗・磁山文化→仰韶文化王湾類型という二つの系統に分かれる。黄河中流域の王湾二期は、黄河下流域の系統を引いており、本分析の対象地は、黄河下流域と黄河中流域・渭水流域といった大きな二系統の境界地帯をも含んでいる。従って、上記した系統性と社会組織のあり方に対して、ある種のモデルを提供することになるであろう。以下、各地域単位あるいは土器文化単位での事例を検討してみたい。

二　裴李崗文化の事例

裴李崗文化の墓群は、河南省新鄭付近の裴李崗遺跡、沙窩李遺跡や莪溝遺跡、さらにそれらより南の石固遺跡や水泉遺跡で認められる。さらに南に位置する賈湖遺跡はやや地域的特徴を持つものの、裴李崗文化と同様に考えられる文化形態であり、ここでも墓群が認められる。ここではこれら六つの遺跡の事例を基に検討を行う。なお、裴李崗、沙窩李、北崗については既に朱延平の論攷[14]がある。これらの墓群に見られる副葬品の内、磨盤・磨棒と石錘はそれぞれ個別に出土しており、両者が組み合わさって出土することはない。粉食具である磨盤・磨棒を女性の道具、

表1　黄河中・下流域の新石器時代編年表

渭水流域	黄河中流域（南部）	黄河中流域（北部）	黄河下流域
老官台	裴李崗下層	磁山	後李
老官台	裴李崗上層	北辛	北辛
半坡期	王湾1期1段	後岡1期	大汶口早期
廟底溝期	王湾1期2段	閻村	大汶口中期
半坡晩期	王湾2期1～3段	大司空	大汶口中期
廟底溝2期	王湾2期4段	台口	大汶口晩期

耕起具である石鏟を男性の道具であると仮定すれば、前者を副葬品に持つ墓を女性、後者を持つ墓を男性とすることができる。さらに朱延平は、こうして規定した女性の墓の方が、男性の墓より、副葬品の土器の数が多いことを根拠として、女性の方が権力を持つ、母権社会であると結論づけている。これは既に問題としたエンゲルス的歴史観を反映したものと考えられるが、果たしてこうした結論が正しいのか、ここでは再度検討してみたい。

(一)　裴李崗遺跡の事例

裴李崗遺跡は、第三次調査[15]において層位的に下層と上層に分かれることが判明した。一・二次調査[16]の大半が下層に含まれると仮定して、下層と上層とに分けて墓群を示すならば、図1の様になる。朱延平は上層をさらに土器型式から二群に分けようとするが、上層全ての墓を二群に分けることが不可能であることから、ここでは上層として一括する。さて下層と上層では、上層に至って墓群の拡大または二分化が認められる。二分化は、二つの墓群の間に緩やかな丘陵の峰部があるためで、地理的な分化によるものである。が、大きく言えば集団の発展に伴う集団分離とも解釈することができよう。また、朱延平は上下層の墓群をさらに細く区分しようとするが[17]、私意的であり根拠が見い出せない所から、ここでは細分しない。

さて、下層の場合、磨棒だけを持つ一号墓は別として、磨盤・磨棒を持つ墓と石鏟を持つ墓は明確に分離している。これらが性差に基づくものかは、人骨の形質人類学的分析結果が示されていないため、性差に関する類推は、民族例に頼らざるを得ない。マードックが示した無文字社会の人々における部族別の性的な労働分担によれば[18]、穀物の粉食は九二・二%の比率で女性の労働となっている。石鏟を耕起具として耕地開墾用とするならば、その男性の労働分担はマードックの民族例によれば七六・三%と高く、男性のための道具と考えることができよう。従って磨盤・磨棒は女性墓、石鏟は男性墓と想像できよう。さて男性の墓と仮定した石鏟を持つ墓には、このほか石斧や石鎌を持つものがあり、副葬品の保有の階層化が認められる。これは女性の墓と規定した磨盤・磨棒を持つ墓が、土器以外でこのよ

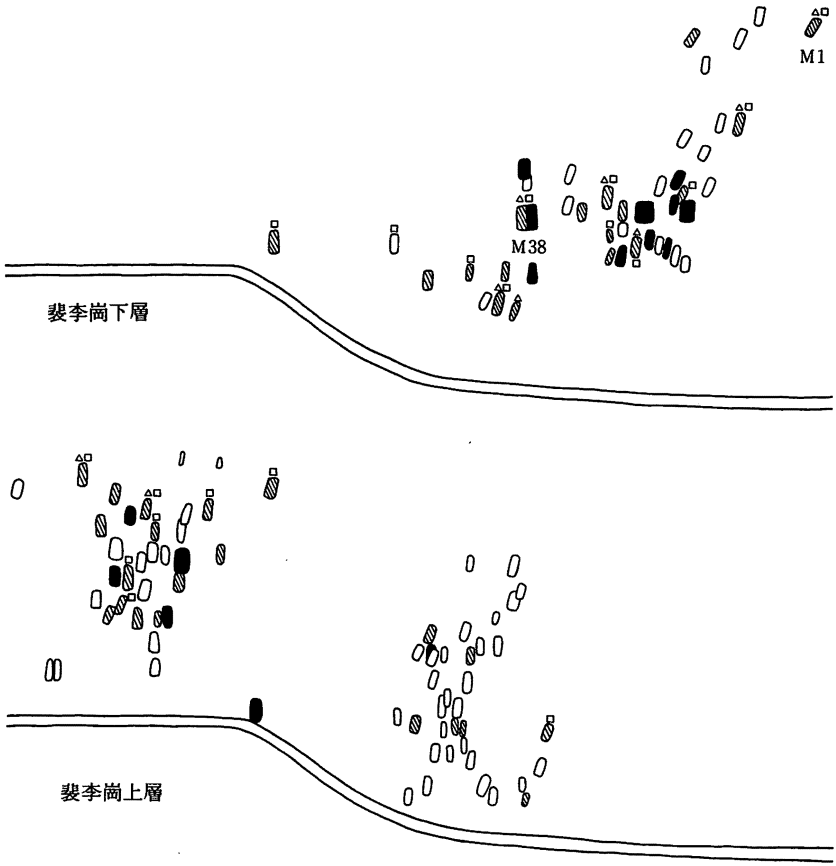

図1　裴李崗墓地の分布
（■磨盤・磨棒を副葬する墓，▨石鏃を副葬する墓，△石斧，□石鎌）

うな副葬品保有の階層化が認められないのと異なっている。その場合、マードックの民族例によれば石斧は伐採斧であり、木の伐採は九二・二％、木材加工は九五・〇％の比率で男性の労働分担となっている。一方、石鎌は粟などの穀物の収穫具と考えられるが、六六・一％で女性の労働分担となっている。この場合、穀物の収穫具を男性墓が持つことを、収穫がその集団での男性の役割と位置づけることもできるが、

収穫から象徴される所有を意味するものとすれば、男性墓に穀物所有すなわち財産権が担われていた可能性があるのである。朱延平が問題としたこれら男性墓と女性墓における優位性は、搬出する土器の量であった。確かに女性墓に伴う土器の量が、男性墓より多いことは確かである。しかしこれから短絡的に女性の社会的な優位性を述べることが可能であろうか。まず、土器という遺物の製作における性的な作業分担を考慮するならば、先のマードックの資料によれば、土器作りは八一・六％の比率で女性の労働分担となっている。従って、副葬土器の量を労働分担を反映するものとするこれまでの前提からすれば、当然の数値として女性墓に多くなるはずである。男性墓と女性墓において最も大きな差は、このように副葬土器の多寡においては優位性を示す女性墓が圧倒的に男性墓より数が少ないことである（図1）。ここで、銅器時代のヨーロッパにおける墓葬の男女関係を示したシェナンの論攷[19]を思い出したい。シェナンは男性墓と女性墓における副葬品の違いとともに、二十代の女性墓における装飾品の多さを結婚によって勝ち取られた地位とする仮説をたっている。その背景には結婚相手の男性の社会的あるいは財産的な地位が関係しているとするのである。この裴李崗遺跡の例をそのまま違う地域でかつ異なった時代のモデルに当てはめるわけにいかないが、何らかの勝ち取った地位としてこれらの副葬品のあり方を眺めることは、意義のあることと考える。これまで、男女にみられた性差による役割分担に応じて副葬品が認められ、かつそこに多寡が認められた。このことは集団内での労働分担における生前の優位性を反映しているものと考えてよいであろう。その場合先に想定した栽培食物の管理としては男性が優位に立っていたと見られることは、これまで規定された母権社会を裏付けるものとはなり得ない。また、三八号墓からは二体の被葬者にそれぞれ磨盤・磨棒と石鏟が供えられている。石鏟に伴う人骨は華奢なため、未成年らしい可能性が報告では述べられている。張忠培・朱延平は、これを母とその子の墓と捉え、母権制の根拠としている。[20] しかし裴李崗文化段階では、他の遺跡の例からも子供の埋葬は認められず、かつ仰韶文化を含めて母子合葬墓の子供にこのような厚葬は認められない。従ってこの三八号墓は、対等の関係の男女すなわち夫婦合葬墓と考

えたい。仮に夫婦合葬墓であるとするならば、既にこの段階では対偶婚が存在していたことになる。そうした対偶婚社会において、男性墓が女性墓より数的に多い所に、母権社会の存在を証拠立てるものを見出し得ないのである。そこに見られた女性墓の土器保有の優位性は、勝ち取った地位とみるならば、男性墓内にも見られた階層的に優位な地位の男性との結婚によって勝ち取った可能性、すなわち集団内での優位な位置に存在する男女に与えられたものとも想像できる。一方では、男性、女性のそれぞれの性差内での優位性を示したのが、男性の場合石鏃、石斧、石鎌であり、女性では磨盤・磨棒、土器の多さということになるであろう。いわばそれは生前の個人における社会内での優位性が示されたものと考えられる。こうした想定は、今まで述べてきたように決して母権社会の存在を肯定するものとはなっていないのである。先に財産権が男性にある可能性を想定したが、父権社会、母権社会の一つの要素である父方居住、妻方居住のどちらかについては論証しがたい。プロセス考古学的にこの社会段階を規定するならば、いわば平等社会である segmentary society（分節社会）の様相を呈していることは間違いない。

(二) 沙窩李遺跡の事例

河南省新鄭沙窩李遺跡[21]も裴李崗遺跡と同様に下層と上層の二時期の墓群に分かれる（図2）。下層・上層ともに発掘区が限られているが、両層ともに少なくとも二つ以上の墓群が存在することは確かであろう。これらの墓群が集団の単位を示す可能性は高い。

さて、裴李崗遺跡と同様、磨盤・磨棒と石鏃を副葬品に持つ墓は、三号墓を除いて明確に分かれる。三号墓の場合、磨盤・磨棒と石鏃の位置が完全に分離しているところから見れば、裴李崗二八号墓の例と同じように、男女合葬墓と考えて差し支えないであろう。このようにして、裴李崗の場合と同様に、磨盤・磨棒を副葬品に持つものを女性、石鏃を持つものを男性と考えると、沙窩李の場合も男性墓が完全に多く、上層はその傾向が一層顕著となっている。また、男性墓では、石鏃に加えて石斧や石鎌などを副葬する場合があり、副葬品に見られる格差は裴李崗と同様に

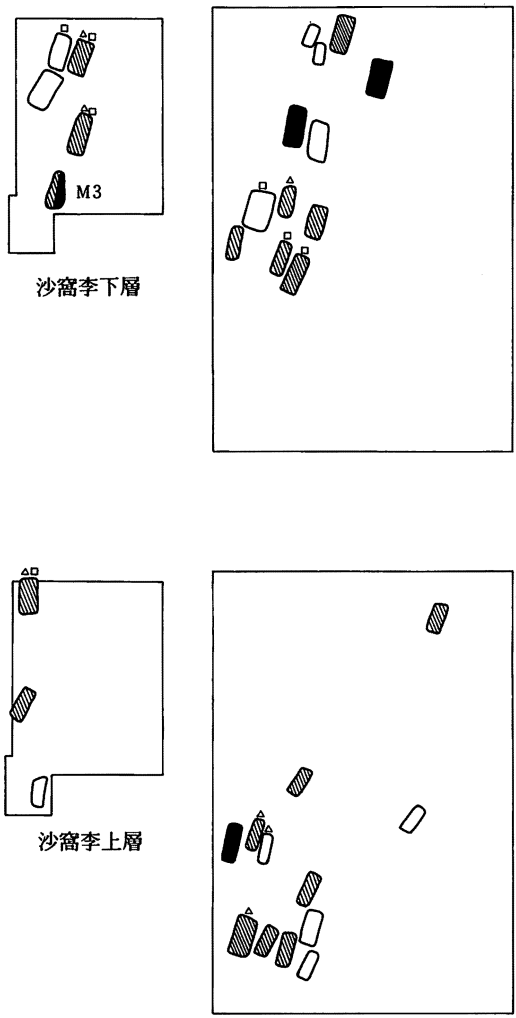

図2　沙窩李墓地の分布
（■磨盤・磨棒を副葬する墓，
▨石鏟を副葬する墓，△石斧，□石鎌）

存在している。一方、男性墓と女性墓に分けた場合に副葬される土器の数量は女性墓が多い傾向にあることも、裴李崗と同様である。従ってそれらから引き出される解釈は、裴李崗の事例と同様といえよう。

(二)　北崗遺跡の事例

河南省密県莪溝北崗[22]の事例も、墓群のまとまりが認められ、人間集団の単位が認められる（図3）。ここでもその他の事例と同様に磨盤・磨棒を持つ墓と石鏟を持つ墓とは、明確に分離している。男性の墓とした石鏟を持つ墓には、

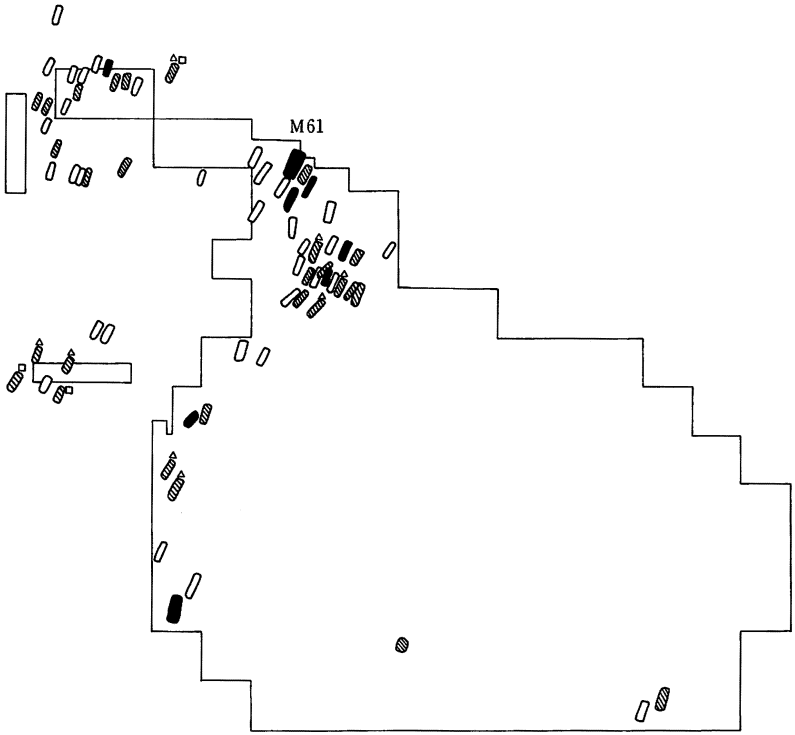

図3　北崗墓地の分布
（■磨盤・磨棒を副葬する墓，▧石鏟を副葬する墓，△石斧，□石鎌）

これも同様に石斧や石鎌をさらに持つような階層的な副葬品の組み合わせが認められると同時に、土器の数量は全体的に見れば磨盤・磨棒を持つ女性墓が多い傾向にある。従って北崗の事例もこれまでの傾向を追随するものである。特殊な例としては、磨盤・磨棒を持つ女性墓と仮定した六一号墓に、もう一体の人骨が葬られていることである。これが男女合葬墓であるかは明確でない。北崗の場合、磨盤・磨棒をもつ墓に陶勺が伴う場合が多く、六一号墓のもう一体の人骨近くに陶勺が置かれていたことから、六一号墓は二体の女性合葬墓である可能性がある。

(四)　石固遺跡の事例

河南省長葛石固遺跡[23]は、層位関係や遺構の切り合い関係により、七期に時期区分されている。Ⅰ～Ⅳ期が裴李

崗文化に相当し、Ⅴ・Ⅵ期が仰韶文化王湾一期に併行する段階、Ⅶ期・Ⅷ期が仰韶文化王湾二期に併行する段階である。なお、孫祖初の編年[24]によれば、Ⅶ・Ⅷ期は仰韶文化秦王寨類型に相当する。また、先に述べたように裴李崗文化は細分が可能であり、Ⅰ・Ⅱ期は裴李崗文化早期段階、Ⅲ・Ⅳ期は裴李崗文化晩期段階に相当すると考えられる。分析する墓葬はⅤ期では僅か一基、Ⅷ期では墓葬が存在しないことから、それ以外の時期を対象に、検討してみたい。また、これまでの事例では、出土人骨の形質人類学的検討が行われていなかったのに対し、この墓群では男女の性別が比定されており、これまでの民族例からの推定の是非を示すことになろう。

裴李崗文化に相当する石固Ⅰ～Ⅳ期において、図4・5に示すように、形質人類学的比定による男女の別を示すと、石錘を持つ墓と磨盤を持つ墓とでは、明瞭に男女の性差が認められる。男性墓と同定された石固Ⅰ期の五六・六三号墓、Ⅱ期の四六・五四号墓、Ⅲ期の二三号墓、Ⅳ期の五号墓では、石錘が副葬品となっている。女性墓と認定されている石固Ⅱ期の三九号墓、Ⅲ期の一四号墓、Ⅳ期の八六号墓では磨盤が伴う。これまでの事例で、民族例にみられる男女の労働における役割分担から、副葬品の別を男女差と推定してきた訳であるが、石固の事例はこのことを論証することになった。逆に言えば、性差による労働の役割分担が明確であり、それに応じて副葬品が規制されていたことを示していよう。またこれまでの検討では、特徴的な副葬品から、男女を同定してきたが、この場合、副葬品を持たない墓や土器のみを副葬する墓は男女の推定が困難であった。石固の場合、形質人類学的に性別が同定でき、この結果からは、石固Ⅰ期～Ⅱ期までは、女性が圧倒的に少なく、石固Ⅲ期で男女がほぼ同数になる（表2）。このこともこれまでの類推における女性墓が男性墓より圧倒的に少ない点に符合している。また、女性墓と男性墓の副葬された土器の数量は、石固の場合、表2のように石固Ⅰ～Ⅲ期では男性墓の方が豊かであり、石固Ⅳ期になって豊かな女性墓がやっとで出現している。石固Ⅱ期以降の男性墓にみられる土器の数量を貧富の差とみるならば、その差は激しく、石固Ⅳ期以降の豊かな女性墓の出現も、資婚による女性の享受の可能性も考慮できよう。なお朱延平は、裴李崗文

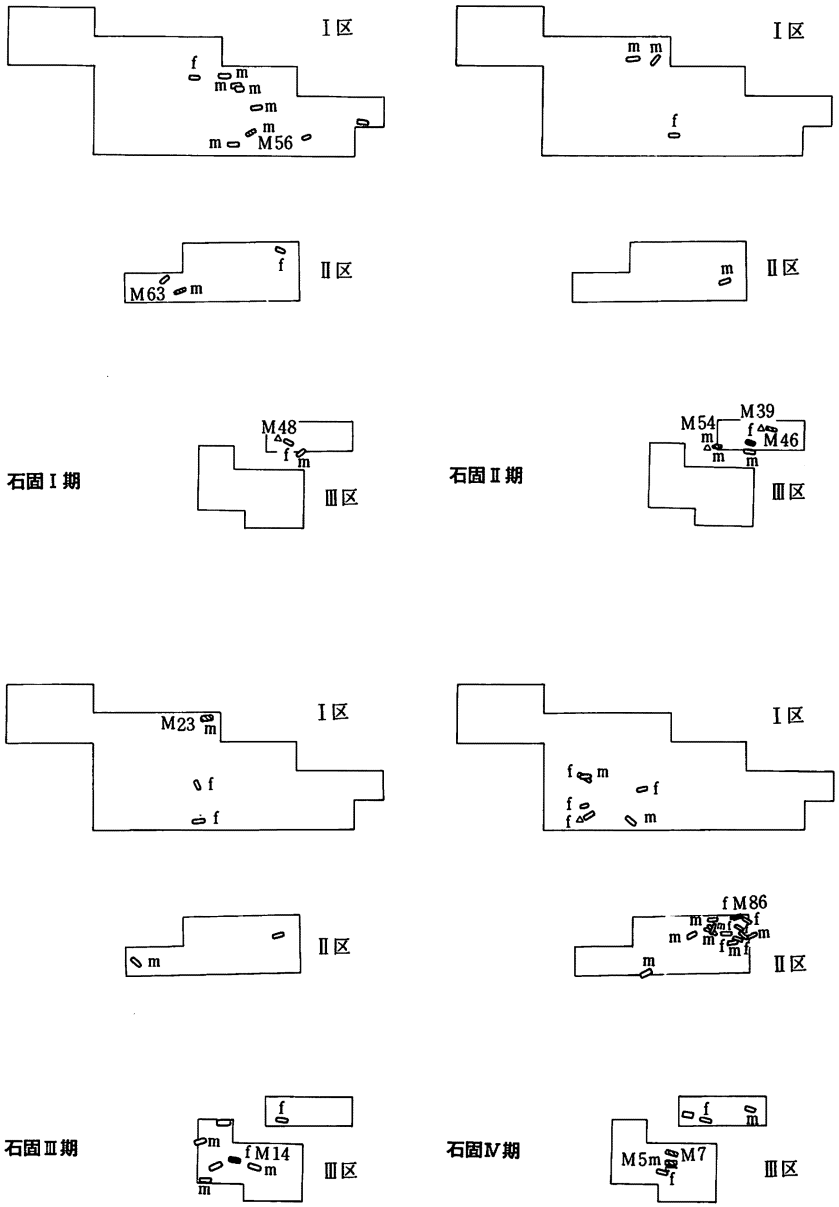

図4　石固墓地の変遷
（m：男性墓，f：女性墓，■磨盤を副葬する墓，▥石鏟を副葬する墓，△石斧）

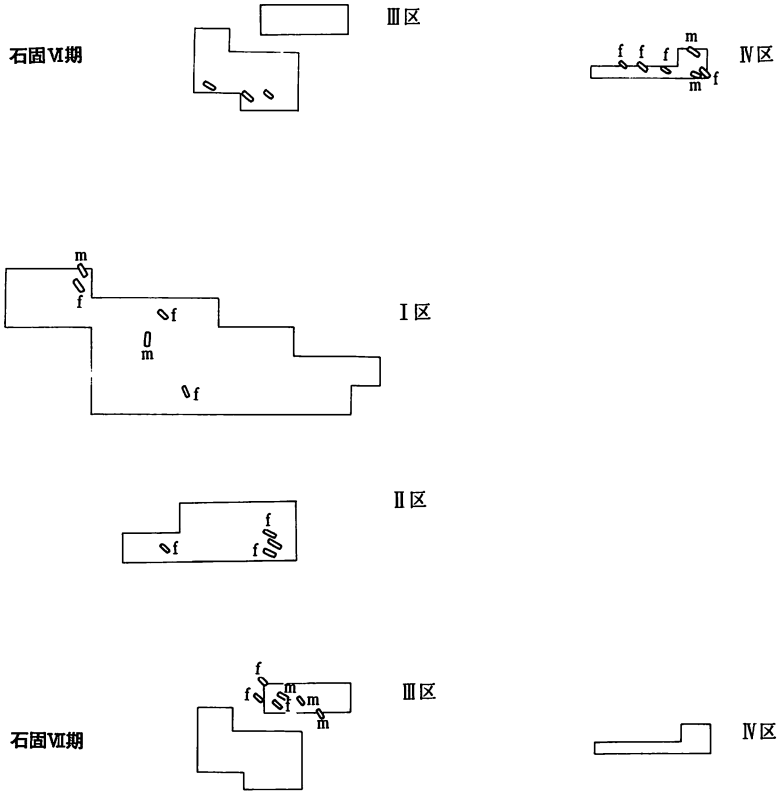

図5　石固墓地の変遷
（m：男性墓，f：女性墓）

化段階の石固墓地の男女数がほぼ等しいものとみているが、[25]これは分析された人骨の一部に基づくもので問題がある。[26]むしろそれらの年齢が一〇～一四才と判定された一体を除いて、すべて青年以上の成人であるところに注目すべきである。すなわち、この段階の墓は成人に限られた選択的なものであったことを認識すべきである。

ところで、石固は発掘区域が限られており、墓域すべてを明らかにしていないが、報告されたものを見る限り、石固Ⅰ期からⅣ期まで墓群のまとまりが認められ、それが集団の単位を形成する可能性を示唆している。しかし仰韶文化併行の石固Ⅵ

期・Ⅶ期では、頭位方向がごく少数の例外を除いてほぼ一定するような、墓地の選定の際のより強い集団的規制が働いている。これは後に述べる大河村四期の墓群のあり方と同様である。さらに墓葬に見られる大きな違いは、これまでの生前における性的役割を強調した副葬品構成は認められず、副葬品を持たない墓がほとんどである。このことは、より大きな社会的あるいは集団的規制が働くことにより、副葬品の埋葬が限られたことを意味し、逆に副葬品の占有を示す社会環境の変化を意味する可能性を考えたい。

(五) 水泉遺跡の事例

河南省陝県水泉遺跡[27]は一二〇基の墓葬が発見されており、その内一一〇基は整然とした配列がみられる。一八列の配列からなる墓群とする考え方[28]もあるが、明確ではない。ともかく墓葬配列は、これまでの事例とは異なり、より集団的規制の強さが認められる。残念ながら、すべての墓葬の副葬品の内容の提示や人骨の性別鑑定が為されていないところから、墓群の検討は困難である。大枠においてはこれまでの事例と同様に、石錘と磨盤・磨棒といった副葬品にはそれらの組み合わせの区別が明確である。ただ報告によれば、六六号墓と一〇号墓ではそれら両者の組

表2　石固遺跡における性別・副葬土器量別墓葬数

分析 / 性別 / 個数	Ⅰ期			Ⅱ期			Ⅲ期			Ⅳ期		
	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明
0	2		1	2			1	3	1	10	6	2
1	6	3	2	3	1		3	1		2	3	
2									3	1		1
3				1	1		2	1				1
4							1				1	1
5											1	
6				1								
総墓数	8	3	3	7	2	0	7	5	4	13	11	5

み合わせが共有したとする記述があるが、それらが合葬墓か単人墓であるかは、資料の提示がないため判断しかねる。また、二九号墓のように石鏃をもつ男性墓で土器総数二二個（この他器蓋二個）をもつ富裕な墓も認められる。僅かに認められる合葬墓で興味深いものには、二体の被葬者が重なった状態で出土した三一号墓がある。これら二体の関係性が注目されるところであるが、性別などの形質人類学的検討は為されていない。

(六)　賈湖遺跡の事例

河南省舞陽賈湖遺跡[29]は、土器の構成は裴李崗文化の要素を基本的に持ちながらも、かなり地域的に変容した文化内容を有しており、生業も長江流域のものに近い可能性がある。ここでも多くの墓葬が発見されているが、個別の内容が報告されているものが少ないことから、一九八三年の調査分に限って検討する。

本遺跡でも早期墓と晩期墓に分かれ、早期墓が五基、晩期墓が一二基報告され、形質人類学的な性別も明らかにされている。早期墓で性別が明らかな墓葬はすべて男性墓であり、男性墓として性別に対応する副葬品としては、亀甲や獣牙のようなこれまでの裴李崗文化の墓葬にみられない遺物が存在する。これはこれまでの副葬品が男性としての労働分担に対応するものであったのに対し、亀甲という労働価値とは別な付加価値である威信財的な要素を示す遺物が認められる。また一三号墓では三体の合葬墓がみられ、そのうち二体が男性と判断されていることから、血縁集団による合葬墓の可能性が高い。後期墓では、可能性のあるものを含め、男女の性別が判断されたものは、それぞれ一基対六基と女性墓が多い。女性墓としてこれまでの裴李崗文化で特徴的であった副葬品である磨盤は、本遺跡でも副葬されており、その被葬者が女性である可能性が形質人類学的に判断されている。一方、裴李崗文化で認められた女性墓の方が副葬される土器の数量が多いという傾向はここでは認められず、相対的に副葬土器の数量は少ない。早期墓と晩期墓を一律に比べることは危険であろうが、男女差として一律に比べた場合、男性墓の方が副葬品の数量や種類が豊富であるということができる。これはこれまでの裴李崗文化に認められた集団構造と、賈湖の集団構造

の差異である可能性があろう。男性墓の副葬品の豊かさと亀甲のような威信財的な副葬品は、男女の社会組織上の優位性の区分がより明確である可能性を示唆しているであろう。

三　仰韶文化王湾類型の事例

裴李崗文化の分布範囲である河南省中部は、裴李崗文化の後には仰韶文化王湾類型が存在することは先にも述べた。文化領域は両文化とも同じであり、系統的に継承関係にあるものと考えられる。その場合、石固遺跡でみられたような墓葬状態に変化が存在するかどうかに興味が持たれる。しかしながら、王湾類型のまとまった墓葬群の報告例はほとんどない。唯一報告されたものとしては、河南省鄭州市大河村遺跡[30]の事例がある。大河村遺跡は仰韶文化から龍山文化まで長期間に亘って存続する遺跡であるが、墓群が報告されているのは大河村四期である。大河村四期は王湾類型二期に相当し、仰韶文化秦王寨期に併行する。大河村四期の墓群は、頭位方向が異なる若干の例を除いて、頭位は南西を向くように規制される（図6）とともに、石固遺跡Ⅵ・Ⅶ期と同じように副葬品がほとんど伴わないことに特徴が認められる。これは一定の頭位方向とともに集団による墓葬への規制の強化がより働いたものとして捉えてよいであろう。ただ、そのような規制の中にも、女性墓には紡錘車が副葬される事例が認められ、女性の性的労働分担の墓葬への反映も、裴李崗文化ほどでないにしろ引き続き認められる。また、

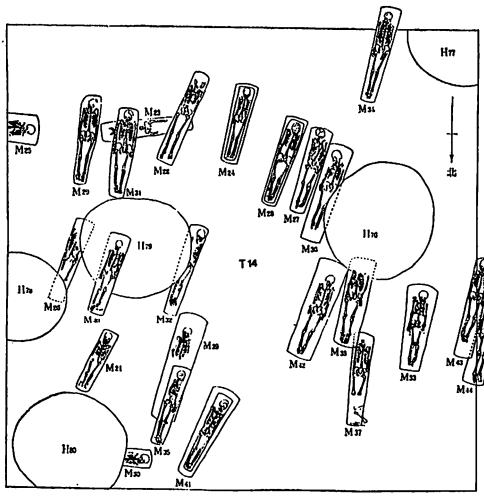

図6　大河村4期墓地

同時期の大汶口文化の特徴を為す背壺を副葬品にもつ女性墓である九号墓は、上記した大河村四期の墓群とは異なった別の地点に立地している。この時期は大汶口文化の影響を受ける段階であるが、それには当然人間の交流が存在しよう。大汶口文化の女性が外婚者として大河村の集団に入った場合、死後は外婚者として墓地が区別されていたと考えたい。

四　老官台文化の事例

陝西盆地を中心とする渭水流域において、裴李崗文化に併行する段階が老官台文化である。老官台文化の墓葬の事例は、裴李崗文化ほどの多くの報告例がないが、埋葬習俗の違いは認めることができる。

(一)　白家村遺跡の事例

陝西省臨潼県白家村遺跡[31]では、裴李崗文化でみられたような少数の人間集団を表すような墓群単位が認められる（図7）。性別の判定が為されていないため明確ではないが、最も副葬された土器数量の多い五号墓には、石鏃がさらに副葬されている。石鏃は先の性別の労働分担で言えば男性に当たるが、白家村墓地における他の副葬品は石鏃や石矛など狩猟具や武器のような男性の労働分担にあたる道具が多い。また副葬品の中には骨器や獣骨の下顎骨あるいは猪の牙などがみられ、裴李崗文化の副葬品とは異なっている。

(二)　北劉遺跡の事例

陝西省渭南市北劉遺跡[32]の墓群も、少数単位からなることが認められ、これまでの事例と同様であるとともに、発掘された地点では三つの集団単位が存

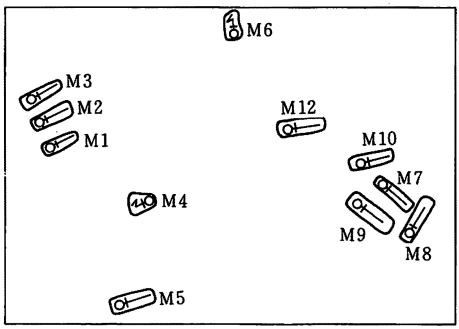

図7　白家村墓地の分布

在する可能性がある（図8）。さてここでも性別判定が為されておらず、副葬品の構成における特徴を眺めることにする。各墓群単位では、副葬品を持つものと持たないものが存在するとともに、副葬土器を持つ五・一一・一三号墓には骨錐、骨矛、骨鏃、貝包丁などが副葬され、白家村遺跡の副葬品と同じ様相を示している。性別労働分担で言えば、男性系列の労働に伴う道具が副葬されているところに特徴があり、裴李崗文化の埋葬習俗と異なっている。この他、骨製髪飾りのみを有する墓が一基存在する。

(三) 大地湾遺跡の事例

甘粛省秦安大地湾遺跡[33]でも老官台文化の墓が僅かに報告されている。この中で興味を引くのは、副葬土器とともに豚の下顎骨を副葬している一五号墓の事例である。白家村遺跡でも獣骨の下顎骨を副葬した事例があったが、この一五号墓は一五～一八才の男性と形質人類学的に鑑定されている。豚の下顎骨の埋葬は、時期的に新しくなる大汶口文化では顕著に認められ、集団内での私有財産の象徴[34]あるいは原始的宗教観念の反映[35]とする見解がある。前者としてみた場合、この男性墓は明らかに所有概念を表していよう。財産権を男性が把握していたとも規定できる。また、白家村や北劉の墓葬にみられたように男性の性別役割分担に対応する副葬品が埋葬される事例からは、老官台文化の墓葬からみた諸

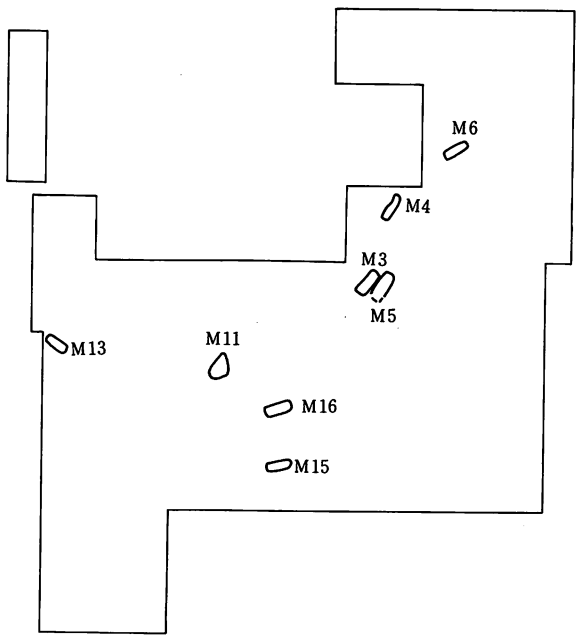

図8　北劉墓地の分布

例としては、男性が社会構成上重視されていた可能性が高く、裴李崗文化の社会構成とは異なっている。

五　仰韶文化半坡類型の事例

老官台文化と時空的にもかつ系統的につながる仰韶文化半坡類型の墓葬構造の事例を検討したい。半坡類型の墓葬の事例は豊富であることから、これまで様々な検討が加えられてきたが、その中でも半坡類型の合葬墓に注目されている。合葬墓は、二体以上の遺体が一つの土壙に埋葬される場合を指すが、半坡類型の合葬墓は二体以上から数十体に達するまで一つの土坑に埋められる。数体以上の遺体からなる合葬墓の場合は、人骨は集骨されており、再葬されている。これは清代の文献[36]にみられる少数民族の民族例のように、死体が骨化して後ある段階に複数の人骨を集めて一ケ所に埋葬する事例があるように、再葬としてみなすべきものであり、その場合の人骨の構成はある集団の構成を表していると考えるべきではないかと思われる。その場合、陝西省華県元君廟遺跡の分析では、集骨されている合葬墓における男女比に注目が為されていた[37]。この男女比は大きく以下の三つに分かれる。A：男性が女性より多い。B：男女が均等である。C：女性が男性より多い。以上の男女比から、まず父権家族の場合は、女性が男性より多くなるべきであると規定して、Aの場合を母権家族を示す集団構造とした。そして父権家族を表すと規定したB・Cの場合、墓葬の体位や副葬品の内容から決して父権の突出した現象は見いだされないことから、これらも母権社会の集団構成を表すものとしている。しかし、Aの場合の男性が女性より多いという墓葬が果たして母権家族を示すものという根拠は全くないものと判断される。同様にB・Cの場合もそうである。従って単なる男女比で父権社会、母権社会を規定することは不可能といえよう。そこでまず、それぞれの墓群で出土している具体的な事例を検討すべきと思える。まず集落と墓群との対応がほぼわかっている半坡類型の姜寨の事例を検討してみよう。

陝西省臨潼県姜寨遺跡[38]は層位や遺構出土の遺物から五期に区分されている。本稿で言う半坡類型に相当するのは、

姜寨一期と二期である。姜寨一期では、先に述べた集骨からなる合葬墓はみられず、単人墓からなるが、一次葬と二次葬に分かれている。すなわち初葬と再葬に分かれている。さらに小児用の甕棺が存在することに特徴がみられる。これは、前段階の老官台文化あるいは裴李崗文化には認められなかった墓葬であり、集団において小児や子供も厚く葬ろうとする観念が芽生えたものと想定できるとともに、集団の成員の大半を厚く葬り、一定の空間に集団の墓群を形成しようとするものである。その意味では集団の規制はより強いものとなったと判断される。一方、時代的に推移した姜寨二期の段階には、多数の集骨からなる合葬墓がみられる。これはいわば二次葬の墓葬であるが、この他二次葬には姜寨一期と同様に単人墓も存在する。一次葬はほとんどが単人墓であるが、この他二人一次合葬墓が二例、三人一次合葬墓が一例存在する。これら複数一次合葬墓はすべてが男性からなっている。このように半坡類型の姜寨遺跡において、前段階の姜寨一期では単人墓の土壙墓からなり、後段階の姜寨二期では単人墓以外の多数二次合葬墓が主体となる墓葬習慣の変化が認められる。この変化に対して厳文明は、この二つの墓葬習慣を時代的な変化とは捉えず、地域的な系統差と捉えようとする。[39] すなわち、同じ仰韶文化廟底溝類型においても、単人土壙墓を主体とする埋葬習俗は涇水と渭水中流域の涇渭地区に主として分布し、多数二次合葬墓を主体とする埋葬習俗は渭水下流域の陝東地区に分布するとする。その場合、姜寨一期では涇渭地区の住民との関連で埋葬習俗が規定されたのに対し、姜寨二期では東側の陝東地区の住民が姜寨を占拠することによって埋葬習俗が変化したと想定している。いわば居住集団の変更によって埋葬習俗が変化したものとする考え方である。ここではこういった初めから集団差あるいは民族差というものにとらわれることなく、まず集団構成を墓葬から把握するよう検討することから始めたい。

姜寨一期の墓葬は、環濠集落の周囲に配置されている。集落内の住居址の配置からは、五つの住居群が並立し存在していたと考えられており、これらの住居群の単位が家族集団単位あるいは氏族単位と考えられており、五つの家族集団が一つの集落を形成している。その集団単位に対応するように三つの墓群が環濠を挟んで集落の外側に位置して

表3　姜寨1期における性別・副葬土器量別墓葬数

個数＼性	男 (%)	女 (%)	不詳 (%)	合計 (%)
0	35(49)	16(30)	16(33)	67(39)
1	13(18)	5(9)	2(4)	20(11)
2	6(10)	9(16)	9(18)	24(14)
3	5(7)	6(11)	6(12)	17(10)
4	1(1)	7(13)	8(16)	16(9)
5	4(6)	5(9)	6(12)	15(9)
6	4(6)	4(7)		8(5)
7	3(4)	1(2)		4(2)
9			1(2)	1(1)
11		1(2)		1(1)
15			1(2)	1(1)
合計（墓葬数）	71	54		174

団に対応する集団墓として一応捉えておきたい。さて、それぞれの墓群における男女の性別における埋葬配置には、大きな傾向性は見いだしがたい。そこで副葬土器の量を男女別に眺めたのが表3である。男女を相対的にみた場合、女性墓の方が副葬土器の数量が多い墓が多く、絶対的に見た場合においても最多の副葬土器を持つのは女性墓である。こうした傾向は裴李崗文化の場合と同様に、仰韶文化半坡類型においても女性墓に副葬土器が多い傾向から、母権社会説の根拠の一つとなっている。[43] 一方、埋葬者の年齢構成を見てみよう（表4）。男性は中年に埋葬者のピークがあり、先史時代の平均寿命から考えれば、普通の死亡年齢のあり方を示している。女性は青年や中年が死亡年齢として多い傾向にある。女性の場合は出産による死亡を考えると、女性墓の死亡年齢は普通の先史時代のあり方を示している。他の二つの居住集団に対応する墓群は、未発掘地に存在するとする考え方[40]が有力であるが、そうでないとする意見[41]もある。また厳文明のように、報告書で姜寨二期の墓とされたものの一部を姜寨一期と考え、姜寨一期の集落の中心地の広場とされたところにも、姜寨一期段階の墓地があったとしている。[42] 頭位方向からⅢ区の場合二群に分かれる可能性がありながらも、ここではⅠ区からⅢ区の墓群を、やはり三つの家族集

いよう。また形質人類学の男性判定において、約一二パーセントの確率で誤差があるとするヴァイスの説[44]を用いるならば、表4に示した男女判定は、男女がほぼ同数存在している可能性を示していよう。こうした場合、小児や子供用の甕棺を加えて墓地群を考えれば、家族集団のすべての構成員が一定の墓地に葬られていたことが想像される。これは老官台文化や裴李崗文化で想定された集団内の一定の選択的な埋葬と異なったあり方とすることができ、これを社会進化として捉えたい。さてこうした年齢構成の基に、被葬者の副葬品の多寡に注目してみたい。ここで仮に全体の墓数の約二割弱を占める副葬土器五個以上の墓を裕福な墓と規定して、その年齢構成を男女別に見てみたい（表4）。相対的に副葬土器の多いと見られた女性墓において裕福な墓は青年から中年に限られている。一方、男性墓の場合は、この裕福な墓が、児童から老年まで満遍なくみられるところに特徴があろう。仮にこの場合土器を多く持つ墓を裕福

表4　姜寨1期における性別・年齢別墓葬数

（*副葬土器5個体以上の墓葬数，**石器・骨器・貝製品副葬墓葬数）

性別＼年齢	嬰児	児童	青年	壮年	中年	老年	成年	不詳	計
	3才以下	4—12才	13—24才	25—35才	36—54才	55才以上	24才以上		
男性		6	4	15	28	6	10	2	71
		*2	*2	*2	*1	*3	*1		
		**4	**1	**4	**4	*3			
女性	1	1	22	8	14	1	7		54
			*3	*2	*5		*1		
			**8	**2	**8				
不詳	3	16	1				2	27	49
		*2	*1				*1	*4	
	**2	**5					**1	**5	

な階層と規定すれば、男性では年齢的に実力のある老年にピークがあるのは妥当であろう。しかし児童においても裕福な墓があることは、その児童の親の裕福さに関係して捉えることができる。とともに女性の児童墓に裕福な墓がないことは、男性のみに財産権があったとする仮定も成り立つのではないかと思われる。その場合、青年から中年までの裕福な女性墓は、裕福な男性の配偶者として捉えることはできないであろうか。さらにその意味で、石器・骨器や貝製品などの狩猟具・工具や装飾品などを持つ墓に注目すれば、こうした副葬品を持つ墓は男性では児童～老年、女性では青年～中年に限られている（表4）。このような副葬品を持つ墓を、先ほどと同じように集団内の裕福な墓として捉えれば、男性では壮年～老年など集団内で力を持つ年齢構成で裕福な墓が存在している。一方児童墓が裕福な副葬品を構成するのは、こうした富裕層の男性の墓であると規定できるとともに、男性にのみ財産権があったあるいは相続権があったこと意味するのではないかと思われる。例えば児童男性墓の二七号墓では、副葬土器以外に骨鏃や骨錐などの狩猟具や工具が納められるとともに、豚の下顎骨が副葬されている。これは老官台文化の際の検討では、明らかに財産を意味していよう。こうして見た場合、先の副葬土器の検討で示したように、富裕な女性墓は富裕な男性墓の配偶者として見れば、合理的に解釈できるのである。以上の推論は、単なる土器の多寡と性別の対応ではなく、集団構成内での副葬品との対応を考えたとき、男性に優位な社会であったと想定できる結果となったのである。

次に、複数二次合葬墓が出現する姜寨二期について検討したい。ここで問題となるのは、報告で姜寨二期とされた墓群の一部が姜寨一期に入るとする厳文明の見解[45]である。厳文明の示した姜寨一期墓の年代的根拠は、副葬土器が姜寨一期と同じであるとするものである。確かにそのほとんどに搬出する尖底瓶I式は、姜寨一期と同じ特徴を有しており、かつこれらの墓が姜寨二期の墓に切られていることからも、厳文明の指摘は正しい可能性が高い。さらに、この姜寨一期の集落の中心にある墓地を、厳文明は集落の構成員の出自を形成する最初の氏族の墓地という見方を示している。この説の当否はさておき、中央墓地の一部が姜寨一期に属す可能性が高いところから、それらの墓群を、以

後の姜寨二期の分析対象からははずして検討していきたい。

さて、姜寨二期は、墓葬の切り相関係と副葬土器の型式から、二つの時期に区分されている。これをここでは姜寨二期前期と後期に区分して表現することにする。姜寨一期とは違って、この墓群に対応する姜寨二期の集落の情況は判明しておらず、おそらく墓群の北、東、ないし東北方の遺跡の最も高いところに位置していただろうと推測されている。また厳文明は、姜寨一期と二期の集落位置は基本的に変わっていないものと想像している。その場合、姜寨一期のように各氏族単位あるいは各集団単位に対応する形で墓地が形成されていたのではなく、姜寨二期では集落全体の墓地が一つの場所に集中するような、集団規制の強化に注目すべきであろう。また、姜寨二期前期と後期はその間に断絶するほどの大きな時期差はないと判断されている。ここで姜寨二期の前期と後期において、単人一次葬墓、単人二次葬墓、複数二次葬墓に分けて分布を確認してみると、前期と後期に明らかに墓群の分布差が認められる（図9）。前期の場合は、単人一次葬墓、単人二次葬墓、複数二次葬墓合わせてみても、東西方向に延びる墓群が形成されているのに対し、後期では墓葬の各種類を通して南北方向へ墓群が配列されているといってよいであろう。

ここで、姜寨二期に見られた単人一次葬墓、単人二次葬墓、複数二次葬墓の区分の意味について考えてみたい。姜寨一期では、複数二次葬墓としては、二体からなる二次葬が一基あるものの、厳文明が姜寨一期と指摘した八四号墓を除けば、基本的に集骨などを行った多数の遺骨からなる二次葬合葬墓はないことから、基本的に姜寨一期では複数二次葬合葬墓がなかったということがいえよう。また、姜寨二期には一次合葬墓も見られるが、事例が僅かであることから、ここでは分類の対象とはしない。さて、姜寨二期前期の単人一次葬墓の男女比を見てみると、男女の不明な墓葬三基を除いて、男性五基、女性三基と、その数量は拮抗しており、ほぼ同数の男女が姜寨二期前期には埋葬されたのではないかと考えられる。この場合、これら全体で九基の一次葬墓をある程度まとまった家族集団ないし血縁集団と考えられないだろうか。同じことは姜寨二期後期の単人一次葬墓にもいえるはずであるが、性別の判定不能な例

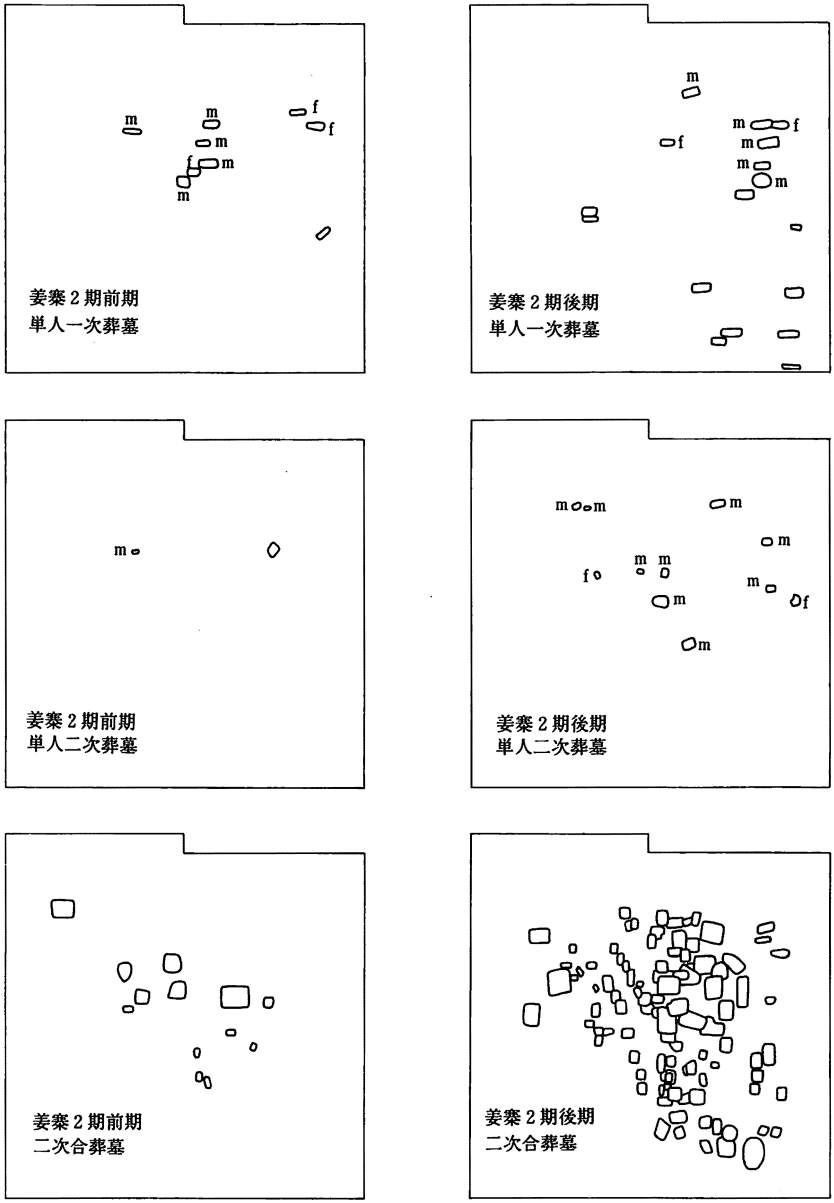

図９　姜寨２期墓地の変遷
（m：男性墓，f：女性墓）

が多いため、この場合は検討の対象とはし難い。一方、複数二次埋葬は基本的にある関連性のある被葬者がまとめて一つの土壙に埋葬されていると判断すべきであろう。それらの男女比に関しては、男性が女性より数の多い合葬墓が圧倒的に多い傾向にある。男女判定の一割は誤って男性と判断される傾向にあるとされるが、この割合を勘案しても、男性数の多さには変わらない。仰韶文化の他の遺跡の合葬墓も総じて男性数が多い。厳文明は、男女比の不一致を、合葬墓が婚姻による家族単位を表したものではなく、血縁家族や氏族の男女比を反映したものとする。[46] そうであるならば、この姜寨二期の合葬墓も基本的にある血縁家族集団の単位を表している可能性が強い。しかしその場合、同じ墓域に、一時埋葬される墓葬と、一人であろうと複数であろうと二次埋葬される墓葬が同時併存する意味は何であろうか。厳文明が想定するように異なった種族の占領によって合葬墓がもたらされたとするには、姜寨一期以来の単人一次葬墓が姜寨二期にも併存することから、納得しがたい。また、単人一次葬墓の副葬品が貧弱になると言うこともなく、占領された旧来の種族の墓と言うこともできない。しかし、姜寨二期前期から姜寨二期後期にかけて、複数二次合葬墓の規模が大きくなり、同じ土壙に三層に亘って集骨がなされる例が見られ、二次合葬墓が次第に派手になることは確かであり、次第に二次合葬墓が当時の人々の主流の習俗になっていったことは確かである。では、この複数二次合葬墓が先の男女の比の分析でも明らかにしたように、一つの家族集団と規定して想定するならば、集骨し、一つの土壙に埋葬することは一つの集団の規制を意味するものと考えられないであろうか。ある血縁的家族集団を一定の段階で時間差をもって再葬するという、集団規制による埋葬習俗があったものと想定できないであろうか。その場合、単人一時埋葬の墓は、そういった血縁集団の系譜の中で、その最後に位置する人々の墓であった可能性も考えるべきであろう。先ほども述べたが、姜寨二期の前期と後期では大きな時期的な断絶はないと判断されている。しかし型式差が生まれること自身ある程度の時期差を想定してよいと判断される。また、墓域の変化はこうした血縁集団の系譜の時期的な変更によるものとも判断される。こうした想定で判断した場合、なによりも姜寨一期から引き続いて

見られた男性の集団内での優位性の基に、より血縁集団の規制が強まったものが、こうした合葬墓と規定できないであろうか。やや想像に想像を重ね、論拠に乏しいが、一つのモデルを提示してみたものである。

おわりに

地域的な文化的系統性をまず明らかにし、黄河中流域と下流域での文化的系統関係をまず整理し、これまでの黄河中流域に見られた裴李崗・磁山文化→仰韶文化、老官台文化→仰韶文化、黄河下流域の北辛文化→大汶口文化の平板な流れを、より地域の実情に合わせ、時間軸上の複雑な文化地域変容を示しながら、さらに地域的な系統関係を整理してきた。この上にたって、こうした文化的地域系統を担ってきた人間集団の社会構造を明らかにすべき地域対象を黄河中流域から陝西盆地に限って、事例的な研究を述べてきた。そしてそこには必然的にこれまで中国考古学会で自明のこととして議論されてきた母権社会から父権社会への移行といったマルクス主義的歴史観のドグマをまず排除し、客観的に集団組織をどう復元できるかを述べてきたつもりである。

黄河中流域では、裴李崗文化に見られた集団組織は、対偶婚家族を基礎とした社会であるとみなし、そのうえで男性と女性の性的社会的分業を、集団としては尊び、その性的分業に合わせて集団内での生前の個人の社会的評価が墓葬の副葬品に反映していたと考えた。そしてまたその段階の男性の性的分業は、社会における財産権の所有を意味するものに近く、父権の母権に対する明確な優位性は認められないものの、その萌芽が認められる社会である。しかし、その社会を母権社会と規定できる根拠はなく、双系社会ないし、父権社会の萌芽段階と想定できよう。そしてまた集団の規制も、それほど強いものではなかったと規定できよう。またこれは、農耕社会における女性の性的分業に対する集団における社会的評価がもたらしたものと思える。その意味で裴李崗文化は、生業における農耕への比重が高いものと想像できる。こうした社会構成が、その後の仰韶文化王湾類型では、比較的規制の強い集団組織を表す

墓制に変移するとともに、基本的に副葬品をもたないとする集団組織の規制が働いているといえよう。すなわちこうした副葬品規制こそが、より強い集団組織のあり方であることは、想像に難くないであろう。しかしその中でも、紡錘車の様な従来の女性の性的分業を表す副葬品が納められるのは、こうした副葬品規制とは異なった枠組みといえる。

一方、陝西盆地を中心とする渭水流域はどうであろう。裴李崗文化段階である老官台文化の墓地例は、まとまった報告が比較的少ないが、その中で検討するならば、副葬品において比較的男性を重視した副葬品構成が認められる。その内容も、狩猟具などであり、裴李崗文化のような農耕具を主とするものとは違っていることは、これらの集団が裴李崗文化ほど、農耕に生業を依存していない可能性ないし、男性が農耕への従事が乏しい段階とも規定できる。人類学的に言えば、狩猟採集社会においては父権社会が卓越していることからすれば、[47] 老官台文化の生業が依然として狩猟採集への依存を強くしている社会、ないし男性の農耕への労働分担の低い集団組織であった可能性も想定できよう。一方では男性が豚の下顎骨をもつなど、男性の財産権を示す事例もあり、男性の集団内での所有権が確立していた可能性が存在する。

老官台文化を系譜的に次ぐ仰韶文化半坡類型は、集落構造からも示されるように、血縁集団に基づく集団単位が存在し、集団組織の規制の強化が働いている。その集団組織を強化する推進役には、父権の強化が認められよう。これは姜寨一期の分析でも示したように、一定幼児に対しても厚い埋葬行うことから見ても、集団組織内の一定の富裕層の子供であると認められ、子供においても財産権が引き継がれると言う、これまで見られなかった所有関係の継続性が見られる。これこそ血縁関係を基とする集団組織の系統的な連続性、あるいは集団維持の原則と思われる。そしてそれを担ったのは、既に論証した財産権にみられるような父権に基づくものである可能性が高い。また女性の富裕層を父権の富裕層の配偶者と想像することも可能であろう。しかし、一方では、副葬土器の厚葬にみられる女性墓の存在を、農耕社会の進展に伴う女性の性的分業の役割強化を社会的に認めた様相としても捉えることが可能ではないだ

ろうか。姜寨一期の分析では父権の進展を強調したが、同じ時期の半坡遺跡の一五二号墓では女性幼児の厚葬墓が存在し[48]、また厳君廟墓地の合葬墓においても四〇五・四二〇・四二九号墓では頭に骨珠を戴く女の児童が存在する[49]。女性への財産の継承も存在する可能性があろう。こうしてみれば、前段階の老官台文化より、女性の社会的な評価は高まっており、双系的な様相は否定できない。むしろ、集団組織の継続的な運営を意図しようとした社会変化、あるいは集団組織の強化を評価すべきであろう。また、こうした集団組織の強化は、姜寨一期にみられる小児用甕棺の出現、さらに小児用甕棺墓群と成人墓の配置区分から、姜寨二期の小児用甕棺の成人墓地内への進入にも認められる。さらに際だったものは、姜寨二期から盛んになる複数二次合葬墓である。この埋葬方式こそ集団組織の単位を示すものであり、その集団関係の規制の強化が認められる。陝西省華陰県横陣墓地の分析を行った朱延平は、合葬墓における墓壙内の人骨群の最小単位を婚姻家族単位とし、さらに墓壙のまとまりを大家族、さらにその墓群のまとまりを氏族、そしてそれらをまとめて横陣の氏族集団とする見解を述べている[50]。この場合、婚姻家族単位を家父長的単婚家族と朱延平は考えているが、これら集団の基礎単位を婚姻家族集団とみなすか、血縁集団とみなすかは大問題である。最終的には人類学的な判断を待たなければならないが、倉林真砂斗[51]や厳文明[52]も想像するように、婚姻家族単位というよりは兄弟姉妹のような血縁集団単位を基にする可能性が高い。先に黄河中流域の大河村にみられる大汶口文化の外婚集団を共同墓地内に取り込まない社会的規制は、婚姻家族単位での集団化がかなり遅れるものではないかと想像する材料である。

さてここでより強調すべきは、姜寨一期の集落内の集団単位での墓群の分化状態から、姜寨二期にみられる墓群の一地域への集中化である。これは姜寨二期と同時期の陝西省宝鶏市北首嶺遺跡の墓地にもみられることであり[53]、普遍化できよう。北首嶺の場合、環状集落は仰韶文化廟底溝類型・秦王寨類型まで続いていたようであり、墓地の移動は仰韶文化半坡類型後半段階（史家類型）に認められる。すなわち集団間における集団化の強化、あるいは社会規制の

強化が認められる。この集団は先の推定通り、おそらくは血縁関係を基にするものである。こうした集団規制の強化は、一方では集団間の格差を生む可能性もある。そうした集団の社会的な成長は、ある意味では次の時代の部族内部闘争[54]への引き金となる可能性も存在しよう。本稿では、その可能性を述べるにとどまり、こうした集団組織の時代的変遷を陝西盆地・黄河中流域に限って予知するに止めたい。

本稿の目的は、中国考古学会に未だ存在する先にドグマがあり、それに基づいて、歴史事象を解釈しようする風潮への、反旗を翻した試論にしかすぎない。また、これまで新石器社会における墓葬から見た社会復元がひとへに階級闘争への道を示すものが多かったことへの反省を示したかったのである。すなわち権力形成への道のりを示すことに主に力点が置かれていたように思われる。しかし、一方には社会規定の根底であるジェンダーの問題については、あまり議論されてこなかったのではないか。この問題を墓葬論に持ち込んだ論攷は、欧米においても数少なく[55]、試論段階を経てはいないが、社会の推移を考えるとき、社会単位である集団の復元は必須となる。その場合、男女の社会構成こそ、その基礎であり、それを無視しては進めない。現在の父権社会の発展法則に、このジェンダーの問題は無視されがちであるが、考古学も取り組む姿勢が必要と考える[56]。また母権制、父権制から短絡的に社会における性別優位性のみを強調する点に問題があろう。ある意味では母権制、父権制という概念をはずして、集団における財産権やその継承問題、そして夫方居住婚、妻方居住婚という居住問題をそれぞれ別々に考えるべきであろう。さらに人類学における母権制、父権制の問題はとかく歴史性の問題に立ち入れない欠点が存在しよう。考古学はこの面では時間軸を有している点、かつこれを地域的文化系統の中で理解するとすれば、歴史性の問題を解明できる新たな地平が開ける可能性があるのではないだろうか。

〔注〕

(1)Renfrew C. & Bahn P. 1991. How Were Societies Organized? Social Archaeology: Archaeology Theories Methods and Practice

(2)渡辺芳郎「墓地における頭位方向と階層性—大汶口遺跡を中心に—」『考古学研究』第四〇巻第四号一九九四年などを初めとする渡辺氏の一連の大汶口文化、山東龍山文化、良渚文化の墓葬の論攷がある。また、倉林眞砂斗「集団墓分析論Ⅰ　中国新石器時代馬家窯文化（半山・馬廠期）を例として」『金沢大学文学部論集　史学科篇』第九号一九八九年などの倉林氏の一連の馬家窯文化、斉家文化の墓葬の論攷がみられる。

(3)エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』一八九一年

(4)張忠培・朱延平「黄河流域史前葬俗与社会制度（上）」「黄河流域史前葬俗与社会制度（下）」『文物季刊』一九九四年第一期・第二期

(5)大林太良「〈母権時代〉は存在したか？」『世界の女性史』二（『母権制の謎』）一九七五年

(6)保定地区文物管理所・徐水県文物管理所・北京大学考古系・河北大学歴史系「徐水県南庄頭遺址試掘簡報」『考古』一九九二年一一期、金家広・徐浩生「浅議徐水南庄頭新石器時代早期遺存」『考古』一九九二年第一一期

(7)張朋川・周広済「試談大地湾一期和其牠類型文化的関係」『文物』一九八一年第四期

(8)石興邦「前仰韶文化的発現及其意義」『中国考古学研究二』一九八六年

(9)厳文明「黄河流域新石器時代早期文化的新発現」『考古』一九七九年第一期

(10)厳文明「略論仰韶文化的起源和発展段階」『仰韶文化研究』一九八九年

(11)王小慶「論仰韶文化史家類型」『考古学報』一九九三年第四期

(12)張忠培・喬梁「後岡一期文化研究」『考古学報』一九九二年第三期

(13)済青公路文物考古隊「山東臨淄後李遺址第一、二次発掘簡報」『考古』一九九二年第一一期、王永波・王守功・李振光「海代山地区史前考古的新課題—試論後李文化」『考古』一九九四年第三期

(14)朱延平「裴李崗文化墓初探」『華夏考古』一九八七年第二期

(15)中国社会科学院考古研究所河南一隊「一九七九年裴李崗遺址発掘報告」『考古学報』一九八四年第一期

(16)開封地区文管会・新鄭県文管会「河南新鄭裴李崗新石器時代遺址」『考古』一九七八年第二期、開封地区文物管理委員会・新鄭県文物管理委員会・鄭州大学歴史系考古専業「裴李崗遺址一九七八年発掘簡報」『考古』一九七九年第三期
(17)朱延平「裴李崗文化墓地再探」『考古』一九八八年一一期
(18)Murdock G. P. 1965. Comparative Data on the Division of Labor by Sex: Culture and Society
(19)Shennan S. 1975. The Social organization at Branč: Antiquity Vol. 49 No. 196
(20)前掲注4文献
(21)中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南新鄭沙窩李新石器時代遺址」『考古』一九八三年一二期
(22)河南省博物館・密県文化館「河南密県莪溝北崗新石器時代遺址」『考古学集刊』第一集一九八一年
(23)河南省文物研究所「長葛石固遺址発掘報告」『華夏考古』一九八七年第一期
(24)孫祖初「秦王寨文化研究」『華夏考古』一九九一年第三期
(25)朱延平「関於裴李崗文化墓葬的幾個問題」『考古』一九八九年一一期
(26)陳徳珍・呉新智「河南長葛石固早期新石器時代人骨的研究」『人類学学報』第四巻第三期一九八五年
(27)中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南省郟県水泉新石器時代遺址発掘簡報」『考古』一九九二年第一〇期
(28)鄭乃武「略談裴李崗文化的埋葬制度」『中国考古学論叢』一九九三年
(29)河南省文物研究所「舞陽賈湖遺址的試掘」『華夏考古』一九八八年第二期、河南省文物研究所「河南舞陽賈湖新石器時代遺址第二至六次発掘簡報『文物』一九八九年第一期
(30)鄭州市博物館「鄭州大河村遺址発掘報告」『考古学報』一九八九年第三期
(31)中国社会科学院考古研究所陝西六隊「陝西臨潼白家村新石器時代遺址試掘簡報」『考古』一九八四年第一一期
(32)西安半坡博物館・渭南市博物館・陝西省考古研究所「陝南北劉遺址第二、三次発掘簡報」『史前研究』一九八六年第一・二期
(33)甘粛省博物館・泰安県文化館・大地湾発掘小組「甘粛泰安大地湾新石器時代早期遺存」『文物』一九八一年第四期
(34)Kim S. 1994. Burials, Pigs, and Political Prestige in Neolithic China: Current Anthropology Vol. 35 No. 2
(35)春成秀爾「豚の下顎骨懸架—弥生時代における辟邪の習俗—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五〇集一九九三年
(36)『貴州通史』巻七・苗蛮に「人死殮後、停於寨旁、或二十年合寨共擇一期、百数十棺同葬」とある。

(37) 北京大学歴史系考古教研室『元君廟仰韶墓地』一九八三年
(38) 西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博物館『姜寨―新石器時代遺址発掘報告』一九八八年
(39) 厳文明「半坡類型的埋葬制度和社会制度」『仰韶文化研究』一九八九年
(40) 厳文明「姜寨早期的村落布局」『考古与文物』一九八一年第一期
(41) 岡村秀典「仰韶文化の集落構造」『史淵』第一二八輯
(42) 厳文明「史前聚落考古的重要成果―《姜寨》評述」『文物』一九九〇年第一二期
(43) 前掲注4文献
(44) Weiss, K. 1972 On the Systematic Bias in Skeltal Sexing, American Journal of Physical Anthropology Vol. 37 No. 2
(45) 前掲注42文献
(46) 前掲注39文献
(47) 大林太良「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』第二巻第二号一九七一年
(48) 中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館『西安半坡』一九六三年
(49) 中国社会科学院考古研究所陝西工作隊「陝西華陰横陣遺址発掘報告」『考古学集刊』第四集一九八四年
(50) 朱延平「横陣墓地初識」『青果集　吉林大学考古専業成立二十周年考古論文集』一九九三年
(51) 倉林眞砂斗「二次合葬の時代」『城西国際大学紀要』第二巻第一号一九九四年
(52) 前掲注39文献
(53) 中国社会科学院考古研究所『宝鶏北首嶺』一九八三年
(54) 宮本一夫「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」『日本中国考古学会』第三号一九九二年
(55) Gibs L. 1987. Identifying gender representation in the archaeological record: a contextual study, The Archaeology of Contextual Meanings. Ehrenberg M. 1989. Women in Prehistory.
(56) この方面の先駆的業績に小野和子「原始母権社会説の検討―仰韶文化の墓葬と住居址をめぐって―」『古史春秋』第一号一九八四年があげられる。